

文語・口語の韻律（前編）

谷 真樹

コスモス全国大会でパネルディスカッションのパネリストという大役をなんとか務め終え、パーティーですっかり抜け殻のようになっていた。そんな折、影山一男さんから「ディスカッションで文語と口語の韻律のことに触れていなかったので評論で書いてみては？」とお声がけをいただいた。

短歌の韻律について書いてみることは、私にとって大きな学びになると思い、勢いでお引き受けしたものの、いざ始めてみると早々に頭を抱えることになった。

そもそも「韻律」とは、なんなのだろう？ これまで多くの歌を声に出して読んできたなかで、ある感覚には気づいていた。歌が天から地へ降りてくるとき、歌によってそのスピードが違ふのだ。ゆったりと漂うもの、きらめきながら落ちるもの、重たく響くもの。その「違い」にあるのが、韻律ではないのだろうか。そう思い、実際に何冊かの文語・口語の歌集を開いてみた。そして「韻律が良い」と感じる歌に片端からポストイットを貼ってゆく。そしてそれらを見比べ、共通点を探し、理論的に説明できるかどうかを検討し……という地道な作業を繰り返す。その結果、文語・口語で共通する韻律的な構造を大きく三つほど見つけたので、これを中心に、

前編と後編にわたり論じてゆこうと思う。

【下の句における 対称展開のパターン】

はじめに、定型のリズム感と結句は密接な関係性があると予測をたてた。下の句に着目して歌を見てゆくと、一定の規則性が認められる歌があることに気がついた。この点について、文語短歌の例として小島ゆかりの『はるかなる虹』を挙げることにする。内的韻律に欠けることの多い口語短歌のなかでは韻律が良いとおもわれる國森晴野の『いちまいの羊歯』を挙げることにする。このふたりの所収の作品を引用しつつ論じてゆく。

・対称展開パターン①

雨雲を喰らふならずやあぢさゐの花にむやみに近づくわれは 小島ゆかり『はるかなる虹』
敵基地攻撃能力保有つて、攻めていいつてことだねつまり
無いものは無いとせかいに言うために指は静かに培地を注ぐ 國森晴野『いちまいの羊歯』

すべりおち溶けてく響き肋骨に沿ってみど

りの花弁をひらく

下の句を見てみよう。たとえば小島ゆかりの一首目「はなに・むやみに／ちかづく・われは」と3・4／4・3という構造になっている。まず、リズム上の特徴として、7音と7音で文節が対称に展開した形になっているのがわかる。この型は中で一度「反転」が起こっているのだ。つまり、7音＋7音の連続をそのまま流さず、内部にもう一つの律動のシンメトリーを作っている。

流れを見てゆくと、3・4の前半部、3音に短い緊張、4音に開放があり、続く次の4・3部分の4音で広がり、最後の3音で収束するような印象になっている。

また、4／4のセクター部分、二首目以降の引用歌いうと「せめて―いいつてことだね―つまり」「ゆびは―しずかにばいちを―そそぐ」「そって―みどりのかべんを―ひらく」のように下の句の中ほどに重心が生まれ、大きく深呼吸をするような印象となっている。「3・4／4・3」は、下の句の内部に反転的な対称構造を作り、定型の均衡のなかで呼吸のようなうねりとふくらみを与えていると思われる。

・対称展開パターン②

花ふいに舌に触れたりかつての日切手を舐めしほどの湿りに 小島ゆかり 『はるかななる虹』
揚げてすぐ食べるたらの芽立つたまま娘と
ふたり食べるたらの芽

寒天は澄んでわたしの胎内とひとしく熱を

与えつづける

國森晴野『いちまいの羊歯』

さよならのようにつぶやくおはようを溶か

して渡す朝の珈琲

小島の一首目「きつてを・なめし／ほどの・しめりに」と今度は4・3／3・4の構造になっている。前述の型と共通点もあるが、上の句の4・3は前半に4音の区切り、後半で短い3音があることで、勢いや余韻の強弱が生まれる。そして3／3のセクター部分、二首目以降の「ふたり／たべる」「ねつを／あたえ」「わたす／あさの」と三拍子の連続によってまるでワルツのようになっていく。それが読み手にテンポの「転調」を感じさせられる構造になり、そこから終わりの4音で開放させるようになっていく。特に小島の二首目は「食べるたらの芽立つたまま」と行為の瞬間を感じさせる効果があるた行音の重なりと「食べるたらの芽」がリフレインされており、心が浮き立つようなリズム感が秀逸である。とりあえずここまで、下の句に着目しその内的韻律の印象を大まかに述べてみた。これらは音楽の曲に例えたとベースとなるテンポに該当する。それ故に同じ型（テンポ）の歌でも、助詞や共通した音の響き、切れなどの条件で韻律の印象がその歌によって変化するということは付け加えておきたい。それでは他の型も述べてみよう。

【下の句における リピート展開のパターン】

こんどは、下の句の展開でリピートをする型を論じる。

・リピート展開パターン①

手をつなぎ人は行くなり遠き近き別れを隠
すさくら の道を 小島ゆかり 同

極月のくうきの燃ゆるゆふまぐれ毛蟹のや
うなたましひならん

水を切る小石のゆくえを知るようにあなた
は笑う果てだとわらう 國森晴野 同

手芸ならすこし好きですばら ばらのあな
たの指を繕う岸辺

これらの歌の下句は、4・3／4・3という韻律的反復からなっている。この反復は聴覚的に「呼吸が二度同じように起こる」構造をつくり、いわゆる等周期的なリズムを生み出しているようだ。一・二首目の「わかれを・かくす／さくらの・みちを」「けがにの・やうな／たましひ・ならん」のように終止部に安定と統一をもたらず効果があると思われる。特に國森の三首目「あなたは・わらう／はてだと・わらう」は同じリズムパターンと「笑う・わらう」と繰り返されている。これは音楽における「同じフレーズの再現」と同様、読み手に「リズムが帰ってくる」感覚を与える。したがって、この型は「終わりに向かいながらも循環」を内包しているとも言えよう。また、4音+3音の組み合わせは「あなたは／わらう」のように日本語の自然な文節と調和しやすく、文語はもとより口語においてもリズムの整合を得やすい。また四首目の結句「繕う岸辺」のように体言止めの効果とあいまってより着地が決まりやすいと思われる。

・リピート展開パターン②

何週目のさびしさならん春の雨ふればだれ
かを呼びに行きたし 小島ゆかり 同

戦場のさくらとおもふウクライナの空のつ
づきの空に咲く花

(百億の昔もこんな空でした) きみが佇む
時の積層 國森晴野 同

移民たち目覚めればただ透명한土地に築い
た脆いふくらみ

これらの四首はどうか見てみよう。3・4／3・4は、3音で立ち上がり↓4音で伸びるリズムを繰り返す構造になっている。

小島の一首目「ふれば・だれかを／よびに・ゆきたし」の「ふれば」は3音なので、音の密度が高い印象になる。そのあとに「だれかを」と、4音が来ると当然だがリズムが一拍分だけ伸びることになる。この短↓長の流れが二度繰り返されることにより「ふれば・だれかを／よびに・ゆきたし」と聴覚的に、押してはほめてゆくような往復運動が生まれる。二首目の「そのら・つづきの／そのらに・さくはな」は前述の「押して・ほどける」拍の繰り返しにより、静的安定ではなく、動的な律動となる。そして主体が見上げる日本の空から遠くウクライナの戦場の空に読み手もいざなわれる構造になっている。三・四首目の下句は「動的な均衡」すなわち反転リズムの反復を形成している。4・3のパターンと比べると、3・4の内部では「切れ」がやや早く訪れるため、リズ

ムが完全に弛緩しきっていない。そのわずかな緊張が二度繰り返されることにより、緊張を持続したまま収束をする。別の言い方をすると「終止」よりも「保留」に近い韻律構造となる。つまり、聴覚的には「まだ続くかもしれない」という「開かれた終止」を形成しているように思える。

音の流れ自体は波打ちつつも、構造のレベルでは均衡を保っている。この「波の中の秩序」が3・4／3・4の特性である。聴覚上息を吸って吐くのが、一定周期で続くような呼吸的律動が生じる。この呼吸の等間隔性が、軽やかなテンポの安定感をつくり出していているようだ。3・4／3・4型は「緊張→開放」の律動を二度繰り返す韻律構造であると思われる。

・リピート展開パターン③

二度までもとかげを見たり本降りの雨のな
か行く駅までの道 小島ゆかり 同

水桶のしじみ身じろぐ心配してつやつやと

濃き大寒の月

ピクルスをざくりと噛めばさらさらと天気

雨です遠く在るひと 國森晴野 同

バーナーの焰がつくる真円しんえんに降るものはない

くきよらかな円

この5・2／5・2型の短歌は比較的少数だが、韻律的に強い印象を与えているようだ。長短の句を交互に繰り返すこの型は「伸びと切断」のリズムを繰り返している。

一首目の小島の歌は四句目の「あめのなか」で流れをつく

り「ゆく」でそれを断ち切っている。これが繰り返されることにより、リズムは立ち上がったては止まり、また立ち上がったては止まるという断続的な反復構造となっている。「あめのなか・ゆく／えきまでの・みち」と2音句での停止は聴覚上の余情と間をつくり出し、「音のない空間」すなわち沈黙の余韻を感じさせる。さらに二首目の「つやつやと・こき／だいかんの・つき」では「こき」と「つき」で語尾の響きを合わせており、音をも呼応させている。

文語短歌においては、小島の歌を見て明白であるが、一首の内部に複数の韻律的技法を併置することが可能である。これに対し、口語表現を基調とする短歌では、韻律の技法を重層的に織り込むことが難しくなる傾向があるようだ。

國森の三首目の「天気雨です／遠く在るひと」の、口語の「です」からもわかるように、語尾に容易につける事が出来るが、逆に言うとう文語と比べてバリエーションが少ない。一首の歌だけなら良いが、単調となるので何首も並べることは出来ない。よって口語だと限界があるのかもしれない。

四首目の國森の「ふるものは・なく／きよらか・えん」には、二度の停止が置かれることにより、下の句全体が断続的かつ機械的な規律を帯びてくる。5音によって重心が安定し、2音で緊張を解放するその反復が「張力の持続」として響くすなわち5・2／5・2型は、「流れと停止」を交互に繰り返すことで、緊張を保ったまま静止する韻律であり、切断の美を現す型である。

(次号後編へ続く)